女教師理紗

痴漢調教路線

羽沢向一
挿絵／佐藤与志朗

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　満員電車でいじられる……4
第二章　駅で奪われる……32
第三章　グリーン車で恥をさらす……85
第四章　女生徒も乗車する……140
第五章　ローカル線で二人乱れる……179
第六章　女教師の終着駅……217

登場人物 *Characters*

白木 理紗
（しらき りさ）

二十七歳の国語教師。スラリとした長身、端正な顔つきで、Ｆカップの豊満な肉体を持つ。意志が強く生徒思いなため学園では人気がある。

桐野 泉美
（きりの いずみ）

理紗の教え子。理紗に恋愛感情にも近い憧れを抱いている。可憐で潔癖な性格の美少女。上品な外見とは裏腹にＤカップの美乳を持つ。

柳沢 喜四郎
（やなぎさわ きしろう）

理紗と同じ樫山学園に勤務する三十歳の数学教師。背が低く小太りな外見からアマガエルとあだ名され、女生徒に嫌われている。

第三章　グリーン車で恥をさらす

理紗はラブホテルに入るのははじめてだ。フロントのおばちゃんから渡された鍵を使って入った部屋は、かなり狭かった。

理紗が時々利用するビジネスホテルと床面積は変わらないが、ベッドサイズが違う。狭い室内に大きなダブルベッドが鎮座しているので、いよいよ狭苦しい。

さっきまで理紗が移動していた線路に面した窓は、カーテンで隠されている。

室内の調度のあちこちに、ロマンチックな雰囲気を醸しだす花の装飾があるが、かえって部屋の安っぽさを強調していた。

室内のすべてが、ここはただセックスをするだけの場所だと、理紗に告げている。ラブホテルの雰囲気にいたたまれず、理紗は身体を縮こまらせて、立ちつくす。

一方の喜四郎は慣れた様子で、ベッドの端にドスンと腰を下ろし、蛙に似た口をさらに横に広げた。

「悪いね。理紗先生のはじめてのラブホテルが、こんなに安いところで。この町にはもっと高級で、面白いものがそろったラブホテルもあるけど、駅前から遠いんだ。そのかわり、一週間前の駅前トイレと同じで、列車の走る音がいいＢＧＭになる」

ここでも喜四郎の言葉にタイミングを合わせるように、駅に近づく走行音が聞こえた。カーテンに隠れた窓も、カタカタと振動している。

鋼鉄の音色をバックにして、痴漢教師が宣告した。
「それじゃあ、脱げ」
そう言われることは、理紗は当然予想していたが、抵抗しないではいられない。
「これ以上は、もう御免だわ。わたしは」
「脱ぐんだ。ぐずぐずしていると、また三つのローターのスイッチを入れるぞ」
「それだけは、やめて！」
また機械で絶頂を迎えさせられるなど、みじめすぎる。
糸に操られるように、両手の指をスーツのボタンへ運んだ。腕から袖を抜いたスーツを、ベッドサイドの小さいテーブルの上に置いた。つづいてスーツの上に、ブラウスを置く。そしてスカートも重ねた。
ベッドの端に腰かける喜四郎の前に、白いブラジャーとパンティ、そして白いストッキングで飾られた女教師の半裸の立像が現れる。喜四郎の視線が、あらわな肌の上を這いまわった。
「たまらなく美しいな。このラブホテルのもうひとつのいいところは、どの部屋にも大きな鏡があることなんだ。理紗先生、自分の姿をじっくりと見てみろ」
ベッドの反対側の壁に、全身を映せる姿見がある。安っぽい照明に照らされた理紗

の身体は、額から足の指の先まで、淡く色づいていた。いまだ冷めやらぬ官能の火照りに焙られて、本来の色白の肌に赤みがさしている。全身を濡らす汗が、さらに肌の色をきらめかせて、巨大な宝石から掘り出した美術品と思わせた。

女子サッカー選手だった理紗は、自分の身体にこもる熱と汗の姿は飽きるほど見てきた。しかし一か所だけ、ボールを追って走りまわった後とは違うところがある。

パンティの中心が、汗とははっきりと違う粘ついた体液でぐっしょりと濡れそぼって、透明になっていた。濡れた布が貼りついて、恥丘の中心に収まるピンクの蝶の形状が、細部までくっきりと浮かび上がっている。

（ものすごく濡れている……なんて恥知らずなの……）

理紗は気づかなかったが、車両の床に愛液が垂れていたに違いない。無理やりに果てさせられたとはいえ、自分の肉体の淫らさが恐ろしい。

「下着も脱ぐんだ」

理紗は覚悟を決めてブラジャーをはずした。

あふれた左右の乳房の先端には、まだ吸盤ローターが貼りついている。

（……情けない……こんな馬鹿みたいなものを着けて……）

二個の吸盤をつかんで引っぱると、柔らかい乳房が前へ引き伸ばされる。変形する

胸の中で、どうにか静まっていた肉の疼きが目を覚ました。
「んん……あうっ！」
二個の吸盤がはずれて、豊乳が大きく弾む。現れた乳首は、濃い桃色に染まり、本来のサイズが想像できないほど高々と屹立して、理紗の羞恥心を激しくかき乱す。
（大きい！　乳首が大きくなって……いやらしいわ……）
ローターをそろって床に捨てると、パンティを下ろした。はずれたバタフライと恥丘の間に、透明な粘液の糸が何本も伸びる。鏡に映った股間は、蝶の頭と胴体を咥えた形のままに肉唇を大きく開いて、べとべとに濡れた肉襞と陰核をあらわにしていた。
（あ、あさましすぎる……）
バタフライごとパンティを足から抜くと、すぐさま両手で剥き出しの豊乳と濡れた肉花を隠した。
理紗の裸身を見つめて、喜四郎がベッドから立ち上がった。余裕を見せつける動作で、鼠色のスーツのボタンをはずしはじめる。
（あっ、はじめてだわ！）
喜四郎に嬲られるのは三回目だというのに、理紗は今の今まで自分が男の裸を見たことがないのだと気づいた。男女ともに裸になるまともな性行為すら、させてもらっ

ていないと痛感させられる。
テーブルに置いた理紗の服の上に、喜四郎が脱いだスーツとワイシャツ、ズボン、鼠色のアンダーシャツ、鼠色のトランクスを乗せていく。理紗の衣服は下敷きになって、まったく見えなくされた。
理紗ははじめて、肉眼で男の全裸を見た。理紗が好むアスリートの筋肉質の体格と正反対の、巨大アマガエルというあだ名にぴったりの身体だ。丸みを帯びた胴体に、ずんぐりした太めの手脚がついた姿は、着衣のとき以上に両生類じみている。男にしては白く、体毛が薄い皮膚は、ひっくりかえった蛙の腹のようだ。
この非力に見える体軀に、優秀なスポーツ選手だった理紗を圧倒する凶暴性を秘めていると思うと、底が知れない不気味さを感じた。
全裸の喜四郎が、再びベッドの端に腰かけると、脂肪のついた太腿を大きく広げた。トイレのときと同じく、丸い腹の下からそそり立つ男のシンボルを、これ見よがしに理紗へ向けて強調する姿勢だ。
理紗は、ぎらつく刃物を突きつけられたように、勃起男根から目を離せなくなる。
「ぼくの前にひざまずいて、パイズリをするんだ。と言っても、理紗先生がパイズリという単語を知ってるとは思えないな。なにをするのか、わかるか？」

理紗は否定の意味で、無言で顔を左右に動かした。
「やっぱりだ。パイズリというのは、理紗先生の立派なFカップで、ぼくのペニスを挟んで、愛撫の奉仕をすることだ」
「そんなことを！」
「普通の女はやらないだろうな。だが、理紗先生はやるんだよ」
（これも、拒否はできないのね）
あきらめの言葉しか、頭に浮かばない。
（それなら、少しでも早く終わらせるだけだわ）
理紗は自分を鼓舞して前へ進み、全裸の喜四郎の両脚の間にひざまずいた。トイレで犯されたときにも、これほど近くで男の肉棒を見てはいない。
直立する肌色の幹の先端で、亀頭が赤く腫れあがって、パンパンになっている。先端にある傷のような切れこみが、体内に注ぎこまれたおぞましい精液を吐くと考えると、奇怪な魔物にも思えた。もう一生、男の身体を好ましい目で見られなくなったに違いない。
「まず、亀頭に唾液を垂らすんだ」
「ええっ⁉　どうして」

「潤滑油がわりさ。濡らしたほうが、互いに気持ちがいいだろう。きれいな顔を、もっとぼくの亀頭に近づけないと、唾液を正確に落とせないぞ」
理紗が恐る恐る首を前に傾けると、口や鼻の皮膚に、亀頭から発するむっとした熱が沁みこんでくる。喜四郎の男そのものが放つ濃い臭いが、鼻孔に侵入してきて、息がつまりそうだ。
無理やりに体臭を吸わされることに、たまらない屈辱を感じる。
唇を開けば、亀頭から立ち昇る不潔な毒に、口内や喉までも汚染されそうだ。
「ああ……ん……」
唇をわずかに開いて、唾液を落とした。
目の前で、亀頭の先端の切れこみに、自分が吐いた唾が付着する。
今まで想像したこともない、理紗にとっては完全に異質な光景だ。
(き、気持ち悪い……最悪だわ……)
「少ないぞ。もっと唾液を出して、ペニス全体を濡らすんだ」
頭上から命令されるままに、理紗は唾を吐きつづける。
男根全体が透明な粘液でぬらぬらになると、新たな指示が出た。
「よし。理紗先生の大きなおっぱいで挟んで、しごくんだ」

（しごけと言われても、いったい、どうしたら……）
理紗は懸命に考え、いかにも慣れない手つきで、左右の乳房を下からすくい上げた。自分の乳房の重さを手に感じて、内心驚いてしまう。
そのまま膝で前へ進み、喜四郎の股間へ近づいていく。
乳房の谷間に、左右の豊乳の肌に、肉棒が触れた。
「あっ……」
と、声が出てしまう。
（熱い！　胸が焼けそう！）
火に触れたかのように反射的に背後へ退きそうになるのを、必死にこらえて、乳房で男根を挟んだ。男の肉幹が、女の乳肉に包まれる。密着した白い谷間から、赤熱した亀頭だけが顔を出す状態になった。
「亀頭を外へ出してどうする。そこをきちんと挟んで、こするんだ」
理紗はあらためて両手で乳房を持ち上げ、亀頭も谷間に沈めた。
（ああ、感じるわ……中に入っているのを、感じてしまうわ）
喜四郎に胸の絶頂を刻みこまれて以来、乳房が鋭敏な感覚器に変貌したことを、あらためて思い知らされる。まるで指先で触っているように、左右の巨乳に挟んだ亀頭

と肉幹の形状を正確に感じ取れた。
（とにかく、動かさないと……）
両手に力をこめて、乳房をうねらせはじめる。中でたぎる男の硬肉に、女の柔肉がより強く押しつけられ、胸に伝わる硬さと熱さをもっと大きく感じてしまう。胸の狭間で男根が巨大化している錯覚に捕らわれ、つい口から喘ぎがこぼれた。
「うん……はんん……」
乳房を動かして肉棒を愛撫するということは、自身の胸を揉みしだくことでもあった。ローターの震動で延々と快楽をたたきこまれ、絶頂を迎えたばかりの胸は、自分自身の指の動きすらも、淫らな刺激として受け入れた。十本の指が、白い肌に食い入り、柔肉の奥に潜りこむたびに、妖しい快感の電流が身体に走る。
（こ、これでは、オナニーをしているのと同じだわ……柳沢先生の前で、オナニーなんて……）
「ううっ……おっんっ、あああ……」
乳房の内側からも、新しい悦楽が生まれた。猛々しい肉棒に左右の乳肉がこすりたてられて、高熱をはらんだ快感が燃え上がってくる。理紗がパイズリをしているはずなのに、逆に理紗の胸の谷間が女性器さながらに犯されていた。

昂る乳房の快感に浮かされて、美貌を甘くゆるめる女教師の顔を、喜四郎が覗きこんできた。
「おいおい。理紗先生ばかりが、そんなによがっていたら、パイズリの意味がないぞ。ちゃんとぼくを気持ちよくしろ」
そう言う喜四郎の蛙顔も、あからさまに男の肉悦を浮かべている。
(うう、早く、あああ、射精して!)
自分の胸を愛撫する指に、さらに力をこめた。少しでも早く射精をさせて、恥辱の作業を終わらせるには、より激しく亀頭と肉幹を刺激するしかない。
それは同時に、乳房オナニーをより激しく、ダイナミックにすることに他ならなかった。
「うんっ、ああん……はあああ……」
乳房が力ずくでこねまわされるにつれて、膝立ちになって背後へ突き出した裸の尻が、うねうねとくねりはじめる。乳房同様に淫具でエクスタシーを掘り起こされた女性器から、新たな愛液が滴り、左右の内腿を伝ってラブホテルの床に流れた。
理紗の敏感な反応を、喜四郎が楽しみながら、さらなる恥辱を命じた。
「まだまだ、上手くできていないな。理紗先生、指で乳首をこすりながら、パイズリ

をするんだ」
「そ、それは、柳沢先生のモノをこすることには関係ないわ」
「とっとと、乳首をこすれ。もちろん、二つともだぞ」
これ以上は、拒否しても無駄だとわかった。しかたなく理紗は両手の親指と人さし指で、電車内から悩ましく勃起しつづけるピンクの肉筒をつまんだ。
「あふっ！」
鮮烈な喜悦が二筋の稲妻となって、全身を貫く。腰がいっそう大きく前後に揺れて、喜四郎へ向けて濡れた花唇を突き出してしまう。
喜四郎の命令ではなく、乳首が発する愉悦への渇望に従うように、理紗は指を動かした。二本の指先から飛び出したピンクの肉突起が、くなくなと上下左右に休みなく向きを変える。
「あっ、あんんん！　お、おかしくなっちゃうう……」
指でこするほどに、肉筒は握力に対抗するように硬度を増して、ズキズキと熱く疼く。強い疼きに誘われて、指の動きが強くなる。指と乳首が協力して快感を高め、理紗を追いつめていく。
「はああ、このままだと……」

第四章　女生徒も乗車する

自分の生徒の喘ぎ声を聞き、悩ましい動きを見せられ、理紗は絶叫した。
「それ以上はやめて！　なにも知らない泉美さんには、手を出さないであげて！　わたしがなんでもするわ。柳沢先生が望むことは、どんなことでもするから、泉美さんは解放して！」
「ああ、いいんです、理紗先生」
喜四郎が応える前に、泉美が身悶えながら声を上げた。
「理紗先生がひどい目にあっているのに、わたしだけが逃げることはできません。わたしも理紗先生と同じになります。同じにならせてください！」
「なにを言っているの、泉美さん。同じなんて、ないのよ」
「今なら、わかる気がします。泉美先生が、柳沢先生を憎みながら、気持ちよくなってしまうことが。わたしも、今、それを感じている気がするんです。理紗先生と同じになれるなら、わたしは怖くありません」
「だめよ、泉美さん。一時の感情に溺れて、馬鹿なことを口走ってはだめ。先生は大人だけど、泉美さんはまだ子供なのだから、自分を大事にしなさい！」
「かまいません。わたしは、はうっ、あああっ！」
担任教師に訴えかける泉美の言葉が、コントロールできない快感に押し流され、よ

がり声に変わってしまう。
乳輪に触れるか触れないかという微妙な位置で、喜四郎の指先が怪しく蠢いている。Dカップながら青さを残した乳肉が、指に押されてへこんでは、反発して盛り上がる動きをくりかえす。
「あああ、理紗先生、いいんですう！　これで理紗先生と同じものを共有できるのなら、あっ、あうん、わたしは満足です、ふあああ……」
かわいい乳首が上下左右に向きを変えながら、徐々に高さを増していくのが、理紗の目にも見てとれた。理紗もトイレで味わわされた、喜四郎の焦らしのテクニックだ。乳房を揉みつづけながら、一番の性感帯である乳首には触れないで、快感のボルテージを高めていくのだ。
（あれをされては、もう、たまらなくなってしまうわ……）
同じ男の指技を肉体に刻みこまれた理紗は、まるで自分の豊乳を責められているように感じられた。実際に、ついさっき絶頂を迎えたばかりの女体は、音叉が反響するように、再び乳房の中を熱く甘く蕩けさせている。
女生徒の乳首と同じに、女教師の乳首も硬さを取りもどしはじめた。むっちりした太腿も、泉美をまねてもじもじとこすり合わされる。

担任教師が再び昂りはじめていることには、泉美は気づかない。ただひたすら、同じ言葉を反復させた。
「ああ、いいんです。これで理紗先生と同じになれます。あひゅ、いいんですう！」
これでいい、とくりかえすたびに、泉美の顔が朱に色づき、恐ろしい悦楽に染まっていく。
「ああ、やめなさい、泉美さん！」
自分の女生徒の恥態を見せつけられ、理紗の胸は絶望に押しひしがれた。
（泉美さんが、怖いほど感じてしまっている……このままだと、わたしと同じように、処女なのに、胸を愛撫されるだけで、絶頂してしまうかもしれない……そうなったら、ああ、もう、とりかえしがつかないわ……）
理紗の懸念を、女生徒の胸を犯しつづける喜四郎の歓声が裏づけた。
「泉美くんはすばらしい逸材だ。ぼくの指の動きに、驚くほど鋭敏に反応する。理紗先生よりも淫らな本能が、この若い肉体の中に眠ってるぞ」
泉美本人よりも先に、理紗がロープをきしませて反論した。
「でたらめを言っても騙されないわ！　泉美さんが淫らなはずがない。柳沢先生の勝手な思いこみよ」

理紗の懸命な否定に、喜四郎が言葉を返すことはなかった。かわりに泉美の右の乳首に、男性教師の右手の人さし指が置かれる。
「はひいいっ！」
泉美は鮮烈な悲鳴を発して、身体を跳ねさせた。数センチ空中に舞った足が、再び敷居を踏む。
「そこっ！　そこはやめてくださいひい！」
泉美は今までも、胸が快感の火で燃えていると思っていた。だがそんなものは小さな松明にすぎない、と思い知らされる。知らないうちに硬くふくらんでいた右の乳首に触れられた途端、松明がガソリンの池に投げこまれたように、悦楽の火柱が轟々と噴き上がる。
「気持ちいいっ！　気持ちいいのっ！」
今まで思ってはいても、口には出せなかった言葉が、ダムが破壊されたようにあふれ出た。
（だめ、なにを言ってるの！　理紗先生の前で、気持ちいいなんて、恥知らずなことを言ってはだめよ！）
自分では声に出してはいけないと思っても、もう制御できない。快楽の暴発に操ら

れた泉美の口から、まともではない言葉が、とめどなく吐き出される。
「壊れる！　気持ちよすぎて、わたしが壊れちゃう！　はあああああっ！」
右の乳首だけを、つままれ、引っぱられ、米粒を丸めるようにこねられる。おもちゃにされるたびに、息をもつかせぬ快感の爆発が、全身の神経を駆けめぐった。
「理紗先生、あふああ、理紗先生、わたし、わたし、はんんんっ！」
泉美の文章にならない訴えを受けて、理紗もまともな言葉を返せなかった。息を呑む理紗の豊乳の先では、生徒よりも大ぶりに熟した乳首がそそり立ち、自身も愛撫を欲してズクズクと疼いている。
（泉美さん、なんて激しい反応をするの。片方の乳首だけをいじられているのに、あれほど乱れるなんて……まさか、右の胸だけで、果ててしまうのでは……）
理紗の不安と疑念は、すぐに現実になる。
「わたし、もう、壊れるう！　理紗先生、わたし、壊れちゃうっ！　理紗先生えええええっ!!」
泉美が聞きかじりで知っているエクスタシーを表現するいろいろな言葉は、なにひとつ頭に上らなかった。身体が破裂しそうなほどの気持ちよさを、敬愛する担任教師の名前を叫ぶことで表現するしかなかった。

「理紗せんせえええええええええっ!!」
泉美は担任教師の名を何度も呼びながら、鴨居とロープをきしらせて、全身を弓なりにそらせた。露出した股間を、呼びつづける理紗へ向けて、無意識に突き出してしまう。
泉美のエクスタシーのこわばりを見つめる理紗の乳首にも、パリパリと電流が渦まき、乳房全体に網の目のように走った。
「あ、ああっ！　うんんんっ……」
理紗は自分が軽くイッていることを自覚した。なにも触れられず、ただ鴨居から吊るされて、教え子の絶頂を見せつけられているだけなのに。
（泉美さんが、右の乳首だけで絶頂を迎えている！　あああ、泉美さんに連れられて、わたしまで……）
泉美の裸身の鏡像を作るように、理紗の全身が自然とそりかえり、弧を描いた。少しでも生徒に近づこうと、裸の腰を泉美へ向けて差し出した。
「あああああ……」
いまだ閉じられることのない理紗の肉花から、新たな蜜液が飛んだ。
泉美の恥丘はぴっちりと閉じたままだが、肉唇の間から、わずかな滴がこぼれ出る。

二十七歳と十七歳の美しい裸体が、ともに官能の飛翔に酔っている間に、新たな責めがはじまった。泉美の放っておかれた左乳首が、強くつままれ、激しくよじられる。今までの愛撫とは違って、意識して痛みを与えられる指の動きだ。

「はひっいいいいいいいいいっ！」

泉美はまた、甲高い悲鳴とも、よがり声ともつかない叫びを、木製の天井へ向けて噴きあげる。

絶頂を迎えたばかりの身体は、新たな刺激を受けて、すぐさま次の高みへと飛翔した。宇宙ロケットの二段目に点火したかのごとく、一直線に次の頂点に到達する。

「り、理紗先生ええええええええええええっ!!」

「泉美さん、はああうっ！」

一瞬の遅れの後に、理紗もまた胸に新たな電流を走らせた。完全にイキきった絶頂ではなく、かえってもどかしくなる中途半端な痺れに、女教師はうねうねと身悶える。

「あああああ……先生……」

「泉美さん、はんんん……」

濡れそぼった吐息をからませながら呼び合う二人の耳に、喜四郎の声が響いた。

「すばらしい！　これほど感じやすい女ははじめてだ。仲間に自慢してやれるぞ」

「きゃあっ！」
泉美の左脚の内腿に、喜四郎の左手の指が喰いこみ、力まかせに持ち上げられた。左足が床から離れ、片足だけのM字開脚となる。広がった股間に背後から右手がそえられ、恥丘が左右に開かれた。
はじめて女の秘密の粘膜に、空気が触れるのを感じて、泉美は言葉を失う。
「どうせ泉美くんも、自分の性器の中を見たことがないだろう。理紗先生が、どんな様子なのか、教えてやれ」
と、耳もとで言われて、泉美ははじめて身体をよじり、持ち上げられた左脚をふりほどこうともがく。つま先が何度も空中を蹴りつけるが、喜四郎の腕はびくともしない。
「理紗先生、見ないでください。泉美の恥ずかしいところを見ないで」
「さあ、教師らしく教えてやるんだ」
喜四郎の声音に、獰猛な色が加わる。耳もとで聞かされる泉美が、本能的に恐怖を感じて、頬を引きつらせた。理紗は応じるしかない。
「泉美さんが恥ずかしがることは、なにもないわ。とてもきれいよ」
理紗の言葉に嘘はなかった。トイレの中で見せられた理紗自身の女性器に比べて、

肉襞の色合いはほとんど変わらない。ともに奥ゆかしい処女の色だ。ただ全体に少し小ぶりで、少女ならではの可憐なたたずまいがある。クリトリスはまだ肉の鞘にしっかりと包まれて、いかにも幼げだ。

（この愛らしい花園が、今から……）

そう思うと、理紗は心臓をえぐられるほど苦しい。だが、どうしようもないのだ。

理紗の瞳が見つめる前で、凌辱者の右手の指が、陰核に伸びた。少女のどこよりも敏感な部位が、包皮の上からつままれ、無慈悲に揉みこまれる。

「ひいっ！　そっ、それっ！」

泉美は叫び、その後は声にならなかった。唇を開いたまま、吐息をとぎれとぎれに洩らすだけだ。

（イキそう！　また、すぐにイッちゃう！　わたしの身体は、なんていやらしいの！　ああっ、もう）

猛烈なスピードで三度目の絶頂に到達しかけたとき、女の真珠から指が離れた。

極まる寸前に放り出されて、泉美の全身がブルッとわななく。男の先走りの体液のように、肉襞の中心からとろとろと透明な愛蜜が流れて、右脚の内腿を伝い落ちる。

（ど、どうして）

「なぜ、途中でやめるの、と思ってるんだろう。クリトリスだけでイカせるのはもったいないからな」
「やめて！」
と、叫んだのはやはり理紗だ。そして無視される。かつて自分の身で起きた惨劇を、今度は外から見せられる。
はちきれんばかりにふくらんだ亀頭が、泉美の花園に迫った。肉唇が押し広げられ、肉襞をかきわけられ、未踏の膣口が一気に裂かれる。
「ひぎぎぎいいいいいいっ！」
泉美の絶叫が、十二畳の空間をつんざいた。理紗が耳をふさぎたくてもふさげない苦鳴を伴奏にして、男の凶器が処女の体内を貫いていく。
「おお、さすが学生の処女だ。理紗先生以上のきつさだ。たまらん」
喜四郎の嗜虐と征服の笑顔の前で、泉美は歪んだ美貌を左右に振りたくり、かすれて上ずった声を発しつづける。
「痛い！　痛いっ！　いっ、痛ひいいいいっ！」
理紗はなにか、声をかけるべきかと思ったが、必要な言葉が思いつかない。喘ぎ苦しむ教え子の姿を見ているだけで、頭が真っ白になり、まともな思考すらできなかっ

た。呆然自失の理紗の目に、いよいよ鮮烈な色が映る。
泉美の膣に付け根まで侵入した男根の周囲から、破瓜の鮮血があふれ、敷居や畳を染めた。喜四郎が自分の家が血で汚れるのもかまわず、泉美の身体を何度も突き上げる。
女生徒の身体は悲鳴とともに上下に揺れ、新たな赤い滴を散乱させる。
「あいいいいっ、先生！　理紗先生っ！　痛いっ、痛いですっ！」
「泉美さん、しっかりして！　今に……」
自分がされたように、クリトリスを刺激されて、痛みよりも快楽が勝ってくる。破瓜の苦痛を超えて、絶頂に達することができる。そう言おうとしたが、理紗は口を閉ざした。疑問が胸にわだかまり、迷ってしまう。
（本当に、それがいいことなの？　わたしのように柳沢先生に苦痛と快感を操られて、淫らな肉体に調教されるだけだわ）
理紗の懸念は、またすぐに現実になってしまった。
「泉美くんも、理紗先生と同じように、処女を奪われながらイクんだ。いいな」
激痛に翻弄される泉美に、返答する余裕はない。再び股間に、凌辱者の右手がまわったことにも気づかなかった。被ったままの包皮を巧みに剥かれて、露出した快感神

経の凝集突起を、指先でしごかれる。
「はおおおおおうううううううっ！」
泉美の反応は、かつての理紗よりも何倍も峻烈だった。一瞬でスイッチが反転したように、処女強奪の苦痛が苛烈な快感に変貌して、泉美を未知の次元へ飛翔させる。
パニックに陥った膣壁が、いっそう強烈に肉棒を喰い締めた。泉美は体内を圧倒する喜四郎の存在感を、さらに何倍にも大きく感じる。それさえも、クリトリスを嬲られる悦楽の炎にそそがれる燃料になった。
「あああああ、狂う！　狂っちゃう！　理紗先生、わたし、狂ってしまいますう！　ああああおおおおうううううっ！」
「泉美さん！」
最後のひと押しは、理紗の声だった。苦痛と快感が充満して破裂する寸前の泉美に、担任教師の声で呼ばれる自分の名前が突き刺さる。
「理紗先生、わたし、イキますうううううううっ!!」
全身の筋肉を硬直させる泉美の膣内で、亀頭が爆ぜた。鈴口からあふれかえる精液の波濤が、泉美の官能をより高く突き上げる。
「あああああ、また、イクっ！　もっと、イッちゃうううううううっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!